

常照

第806号

『迷いと救い』

仏教では私たち人間は「迷いの存在」と教えられます。自らが作り出す「むさぼり・いかり・おろかさ」の煩惱に振りまわされ、そのことに気づけずに、まわりを傷つけそして自分をも傷つけている、そういう悲しい存在なのだそうです。そういういわれると「なるほど、そうだなあ」と思わないこともありませんが、普段はあまり意

識することは無いというのが正直なところではないでしょうか。昨年、ある研修会でこんなことがありました。

仏教壮年会、仏教婦人会が中心になって開催されたその研修会には、約二百名の方々が参加されていました。厳かで和やかな音楽法要ではじまり、前半はご講師さんのご法話を聴聞し、後半は参加者からの質問に答えるという内容でした。

後半になって、あらかじめ提出されていた質問にご講師さんと担当の住職さんが答えていきます。

「真宗ではなぜ線香は立てないのか」、「仏さまが金ピカなのはなぜ」とか「永代経の懇志額はいく

「らがよいか」など、普段はちよつと聞きずらいような質問もあり、なかなか盛り上がっていました。

そんな中、「仏教では救われると言いますが、救いつて何ですか」という質問に、会場はシーンとなりました。そして、この質問用紙にはカッコ書きで（私は救われたと思います）と書いてあったそうです。ドキッとしました。この質問を書いた方は「私は迷ってなどいないから、救いは要らない」と言っているのです。

ご講師や担当の方は何と答えるのだろうと、興味津々で聞いていますと、進行役の住職さんがこんな話をしてくれました。

「私は三、四年前まで町の消防団

に入っていました。消防団の出番は、実は、火事よりも捜索が多いんです。山菜取りなどで行方がわからなくなった方を捜索するんです。

何年か前にも捜索の出番があり、私もかり出され、お手伝いをしました。捜索をはじめて三日目になり、消防団のみんなにも疲れの色が見えてきたころ、遠くの方で「おーい、見つかったぞー」という声がありました。私は、ああよかった、行方不明の方が見つかったのだと安堵し、ふと顔をあげると消防団のみんなが私の周りを取り囲んでいました。一瞬、何が起こったのか分かりませんでした。が、見つかったのはこの私だった

んです。探しているはずの私が、実は探されていたのです。私自身は迷っているなどはちっとも思いませんでした。が、いつの間にかみんなと離れて、探されていたのです。これが、迷っているということなんです。迷っているものは、迷っていません。人から「あなた、迷ってますよ」と教えてもらわないと自分が迷っていることに気づかないのでしよう」。

会場の笑いを誘ったこのお話は、とても大事なことを教えてくれました。

「迷う」とは、行き先がわからないことではなく、今自分の居る場所がどこなのかがわからないことだと、教えていただいたことが

あります。

「教えを聞く」ということも、私には実は迷っているものだ、そのことを教えていただく。その迷いの私に「あなた、迷ってますよ」と気づかせ、なんとか迷いを超えさせたいと願っておこされた本願を聞かせていただく。迷ってなどいない、救いなど要らないという私に、おのれの迷いを気づかせ、自分の今いる場所を知らされること。

浄土真宗の「救い」ということも、そこから始まるのではないのでしょうか。

ご門徒の真正直な質問が聞いてくれた、尊いご縁でありました。

◇◇◇ 人生花づくし ◇◇◇

親の教えは	きくのはな
人の悪くは	くちなしで
頭は垂れて	ふじのはな
笑顔あかるく	ひまわりで
愛とはぐくむ	ばらのはな
心清らか	しらゆりで
せは移ろいて	あじさいの
月日は早く	たらばなで
散り際さやか	さくらばな
先は浄土の	はすのはな

三月の常例布教(ご法話)のご案内

○前期 三月七日(日)～十一日(木)

休 座

○後期 三月十三日(土)～十六日(火)

東海教区 桑名組 教宗寺

講師 藤野 和成師

○春季彼岸会布教

三月十八日(木)～二十日(土)

北海道教区 函館組 誓願寺

講師 上野 顕至師

○場 所 小樽別院内

○時 間 午後二時(法要終了後)～
午後三時半

◎三月二十日(土)は春季彼岸会の御中日のため、月忌参詣はお休みさせて頂きます。
彼岸の法要・法座は席の間隔を保ち、換気実施の上、開催いたします。どうぞお寺にお参りください。
尚、法座は急遽中止となる可能性がございますので、確認の上、お参りください。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院

電話 (一三四) 二二一〇七四四番
FAX (一三四) 二九一四〇八〇番
テレホン法話 二七一六一六番